



川崎 興太 教授

福島の長期にわたる復興を考える

福島長期復興政策研究会

福島大学共生システム理工学類の川崎興太教授は、福島長期復興政策研究会を設立(2018年5月)し、福島の長期にわたる復興や復興政策のあり方に関する研究に取り組んでいます。100人超の同研究会では、原発避難12市町村を対象とし、住民や首長らへのヒアリングや現地調査、講演会を通し、多面的に考察しています。

6月に実施した福島スタディツアー(2日間)には、地域未来デザインセンター・富岡サテライトから5人が参加しました。

県内外の研究会メンバー(計39人)らと福島第一原子力発電所、中間貯蔵施設などを視察し、地元で活動する人々から講話を聞くなどして、「相双の今」を捉え、活発な議論を行いました。川崎代表は「福島の復興はここ数年が勝負だ。メンバーの力を結集し、福島の将来を見据えた研究を続けていきたい」と熱く語ります。



▶ 6月の福島スタディツアーの参加者



相双地域支援サテライト
マスコット
そうそうくん

相双地域支援サテライトの活動

教育環境整備

双葉中学校での美術指導

双葉町の子どもたちは、双葉郡8町村の中で、いまだに避難先であるいわき市錦町の仮設校舎で学校生活を送っています。昨年度、中学校から美術の授業と連携したプログラムの要望を受け、福島大学人間発達文化学類芸術・表現コースの渡邊晃一教授による美術指導を実施しました。今年度も渡邊教授の講義を2回予定しており、7月19日(水)に第1回の「絵画の基礎～デッサン「球体」の描き方」を指導してもらいました。生徒たちにもなじみのあるアニメや芸術家の作品を例に挙げたり、ジョークが飛んだりとユーモアにあふれた授業で、テーマである「球体」デッサンも、講義を聞く前と後で、その完成度が大きく変わりました。次回は「人体」のデッサンに挑戦します。



▶ 渡邊晃一教授の楽しい講義



▶ 球体のデッサン中



人あつての野馬追。 移住者に関心持たせたい



▶ 神前に裸馬を奉じる妙見信仰の祭礼「野馬懸」

相馬小高神社
たねしげ
相馬 胤茂 宮司

相馬野馬追の神事「野馬懸」が行われる相馬小高神社の相馬胤茂宮司に、震災からの復興に向け、地域とのつながりや課題について聞きました。

相馬野馬追は相馬氏の遠祖・平将門が下総国で軍事訓練をしたのが起源で、今年は相馬氏が当地に下向して700年の節目に当たります。

避難指示が解除されて住民が戻りつつある時にコロナ禍に見舞われ、野馬追も縮小せざるを得ませんでした。小高神社の崇敬者は多くが双葉郡の方々。今年は多くの人出があり、私も兼任する県職員として一時大熊町に赴任していただけに感慨深いものがあります。

震災の影響でコミュニティが変わり、野馬追を支える人は減ってしまいました。人あつての祭りなので、新しく移り住んだ人たちにいかに関心を持ってもらうかが、存続のための課題だと思っています。

お知らせ

地域未来デザインセンター・シンポジウムを開催します

福島大学地域未来デザインセンターでは「相双地域支援サテライト」の活動を幅広く知っていただくために、2023年12月9日(土)13時30分から福島市にあるホテル福島グリーンパレスにおいてシンポジウムを開催いたします。詳細は当センターHP、当サテライトHPに後日、アップいたしますのでぜひ、ご参加ください。



「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。



TOPICS | トピックス

猛暑について神馬奉納 南相馬・小高の「野馬懸」神事



▶ 相馬小高神社
たねしげ
相馬 胤茂 宮司

南相馬市小高区の相馬小高神社で7月31日(月)、3日間の相馬野馬追を締めくくるとの神事のまかけ「野馬懸」が行われました。猛暑の中、3頭の裸馬を境内に追い込み、白装束の御小人10人が素手で捕らえて神前に奉納しました。

相馬野馬追は、毎年7月の最終土、日、月曜日に同市と相馬市の2市3町で行われる国指定重要無形民俗文化財。一千有余年の昔、下総小金ケ原(現在の千葉県西北部)の牧に野生の馬を放ち、兵を集め、野馬を敵兵に見立てて捕獲する軍事訓練として始まったとされます。その後、捕らえた馬を神前に奉じる妙見信仰の祭礼へと変化。この祭礼の名残をとどめるのが、絵馬の原型ともいえる同神社の「野馬懸」神事で、神馬を奉納して地域の安寧を願います。

神事を司る相馬胤茂宮司(55)は「震災以降、最も人出があつて感慨深い。地域の皆さんに震災前の思い出も含めて、ふるさつを感じてもらえるような神社としてあり続けたい」と語ります。

浪江町 産官学民で防災推進

— 取り組みと課題



福島県では東日本大震災後も、2019(令和元)年10月の台風19号や、2022(令和4)年3月の福島県沖地震など、自然災害が多発しています。帰還や移住の進む浜通りでも、防災の取り組みが必要ですが、どのような課題があるのでしょうか。今回は、10月28日(土)に相双地方総合防災訓練の実施が予定されている浪江町で、防災の取り組みや課題、防災とまちづくりの関係について浪江町役場と住民の方々にお話をうかがいました。

これまでの住民と移住者、 民間との共助で進める 防災とまちづくり

浪江町総務課防災安全係

鎌田 典太郎係長(写真左) 渡邊 善明主査(写真右)



2017(平成29)年3月に避難指示が一部解除され、帰還できるようになって以来、浪江町役場でも防災の取り組みを進めています。原子力防災については、再び原子力発電所から放射性物質が飛び散ってしまった際、二本松市に避難することになっていますが、どの道路を通過して避難するのかなど、震災前より、明確にしています。

2022(令和4)年3月には、災害時に避難所として機能する「防災コミュニティセンター」の整備が町内4カ所(大堀、幾世橋、浪江、苧野)で完了しました。現在は、室原地区に防災拠点を整備しています。防災備蓄倉庫と管理棟からなり、災害時は避難所となります。また、大規模な水害発生時は、役場庁舎が浸水する恐れがあるため、防災拠点に災害対策本部機能を移転することを検討しています。2024(令和6)年1月末に完成予定です。

2019(令和元)年の台風19号では、町内でも土砂崩れや住宅などに浸水被害がありました。また、2021(令和3)年2月、2022(令和4)年3月と、2年続けて福島県沖地震が起きているように、様々な災害に警戒が必要な状況が続いています。

浪江町の防災上の課題としては、震災前の地域のコミュニティが失われ、以前の助け合いのある状態を回復するのに時間がかかることです。防災コミュニティセンターごとに、地域住民が避難訓練などの日頃の備えを行い、共助の関係をつくっていかねばと考えています。

現在、浪江町に新たな魅力を感じ、移住する方が増えています。以前からお住まいの地域の方々と、新しく移住してきた方々と、一緒に交流の機会を持ちながら、防災の取り組みを行うことができると考えています。そこで、10月28日(土)に実施する相双地方総合防災訓練に向けて、一部の地域では、そこにどうの方が居住しているのか、避難のときに支援が必要かなどを地図に書き込んでいく取り組みを住民の方々と一緒に行っています。

また、総合防災訓練の際には、住民だけではなく町に支援をいただいている日産やトヨタなど、様々な企業に関わっていただきたいと思っています。町の産業団地に拠点を開設した會澤高圧コンクリート株式会社さんとは、連携協定を結び、衛星技術や産業ドローンを用いたピンポイントの豪雨・津波防災支援システムの開発を進めています。

今後も、町の様々なつながりを生かした防災の取り組みを進めていきたいです。そのことが、今後のまちづくりにもつながると考えています。



▶ 幾世橋小学校の跡地に整備された、幾世橋防災コミュニティセンター



▶ 燃料電池車(FCV)からの給電について職員防災訓練で説明するトヨタ社員



INTERVIEW

居住実態の把握が重要

幾世橋行政区長

永田 行直さん



浪江町幾世橋地区の防災上の一番の課題は、誰が住んでいるか分からない、住民を把握できていないことです。以前は行政区の下に、組、班と小集団があり、区長が組頭に号令を出し安否確認などができていました。しかし、現在は居住実態が分からず、小集団が作れないため以前の組織とルールが機能していません。

この地区は2本の川に挟まれている場所もあり、津波や洪水の際の、避難方向が逆になることがあります。そのため、個別の避難ルートの作成が急務ですが、ここで課題となるのが居住実態です。

現在は役場と各区長が連携して土台となる名簿の作成を進めています。名簿を基に明確な避難ルートを決め、それを住民に浸透させるシステムを築き、まずは10月に行われる防災訓練で確認し、その後を生かしていきたいと考えています。

日常的な人と人との関わりを

浪江町地域おこし協力隊

塩野 美里さん



浪江町の復興の力になりたいという思いから2021(令和3)年に浪江町へ移住してきました。移住4カ月目で福島県沖地震が起き、不安の中、周りの方々に助けられる経験をして、災害で悲しむ人を増やしたくないという思いから、同年の6月に防災士の資格を取りました。

防災活動や、趣味の音楽活動を通じている色々な人と知り合い、浪江町のことを教えていただく中で感じたことは、日常的な人と人との関わりが有事の際に機能するのではないかということです。そのような関係性が防災にもつながっていけばいいと思います。

まだ動き始めたばかりですが、手探りながらも住民の方と話し合い、住民の方が自分事として主体的に活動していけるよう、サポートしていきたいと思っています。

福島大学の 取り組み

福島大学公式マスコット
キャラクター
めばえちゃん



福島大学でも、行政政策学類の西田奈保子准教授と、そのゼミ生の協力を得て、10月28日(土)の総合防災訓練の前に、浪江町幾世橋地区の防災上の課題を発見する「防災まちあるき」を実施する予定です。その準備のため、西田准教授とゼミの学生は8月3日(木)、幾世橋行政区長の永田さん、北幾世橋北行政区長の佐藤さんたちから、幾世橋地区の防災上の課題などを教わりました。

今後も福島大学では、浪江町をはじめとする、浜通りの防災の取り組みを支援していきます。



▶ 浪江町幾世橋地区の防災上の課題を住民の皆さんに聞く西田准教授(左端)